

宗教心理学研究会ニューズレター

第18号 2013.3.25

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

特集: 科研費研究プロジェクトから思い描く宗教心理学の未来	-----	1
科研費プロジェクトを通して感じたこと, 考えたこと	-----	浦田 悠 2
「被災者」と研究	-----	大村哲夫 3
宗教心理学の研究会プロジェクトに期待できる貢献	-----	ミカエル・カルマノ 4
質的研究班の取り組みと今後の取り組み	-----	川島大輔 7
ポップな大衆向け文化としてのスピリチュアリティ	-----	具志堅伸隆 8
礼・節と討論とデータ開示	-----	Masami Takahashi 9
宗教心理学がつなぐ臨床心理学と仏教	-----	武田正文 11
科研費プロジェクト(B)「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連 ー苦難への対処に関する実証的研究ー」に参加して思うこと・期待すること	-----	中尾将大 12
事務局からのお知らせ	-----	14

特集: 科研費研究プロジェクトから思い描く宗教心理学の未来

2012年度により、「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連ー苦難への対処に関する実証的研究ー」(2012年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究代表者: 松島公望 課題番号: 24330185)とのプロジェクトが、宗教心理学研究会の会員有志を中心に生まれ、始動しました。

日本の心理学分野では、科学研究補助金基盤研究(B)において「宗教性／スピリチュアリティ」に関するテーマが採択されることはおそらく初めてではないかと思えます。今回の採択は、心理学分野においても「宗教性／スピリチュアリティ」に関する実証的研究に対する関心が高まっていることを裏づけるものであり、関心の高まりだけでなく、これらの研究が日本において必要であることをも裏づけるものであったように感じています。

このような状況を受けて、今回のプロジェクトに参加している会員の方々に「科研費研究プロジェクトから思い描く宗教心理学の未来」をテーマにご寄稿いただきました。科研費研究プロジェクトを通して、宗教心理学においてどのような可能性が広がるのか、またどのような展開が期待できるのかをそれぞれの立場からご執筆いただくことができました。

今回の特集を通して、これまでとは異なる角度から宗教心理学の未来を考える機会になれば幸いです。

科研費プロジェクトを通して感じたこと、考えたこと

浦田 悠(京都大学)

私は、この科研費研究プロジェクトでは、質的研究班の研究協力者として参与させていただいております。私自身は、これまで人生の意味の問題に細々と関心を持ってきました(浦田, 2013)。もちろん、人生の意味を考える時、宗教は必ず出てくるトピックの1つですが、私は宗教に関することを直接研究のテーマにしたことはありませんので、本科研にお誘いをいただいた際も、「研究協力者」という肩書きの通りに何が協力できるのか、はなはだ心許ない気持ちでございました。ただ、宗教心理についての関心は以前からあり、この研究会で示唆をいただくことも多々ありましたので、更に本格的に学びを深めたいという思いで有り難く加わらせていただいた次第です。

川島先生が紹介されていますように、質的研究班では、喪失後の意味再構成と宗教／スピリチュアリティの関連を検討するための準備を進めています。ここでの私の主な役割の1つは、宗教と災害、および意味づけの問題について、まずはこれまでの理論や先行研究をレビューし、現在明らかになっていることと、これからの問題点を洗い出すことです。

現在、レビューに使用するための論文を収集・選定しているところで、詳細については論文の形でご報告したいと思っておりますが、「宗教／スピリチュアリティ」と「災害もしくは喪失／死別」というキーワードで検索しますと、1000本以上の論文が出てきますし、とりわけ2000年ごろ以降の研究の量に圧倒されます。また、もう少し視野を広げてみれば、1990年代末から進化心理学や脳科学の点から宗教が取り上げられることが盛んになり、現代の心理学者によって(広い意味での)信仰の問題が取り上げられることも、ここ数年で特に多くなった気もします(e.g., Haidt, 2006 藤澤・藤澤訳 2011; Humphrey, 2011 柴田訳 2012; Bering, 2011 鈴木訳 2012)。これらの著作でも、なぜ人は神を必要とするのか、なぜ偶然と思える出来事に必然的な目的やサイン

を見いだそうとするのか、なぜ畏怖の感情を持つようになったのか、等々の根本的な問題が、主に進化論的な観点から考察されています。このようなテーマは、今後の心理学でも周辺諸科学と融合しながら、より真剣に取り上げられることになるだろうと思います。

しかしながら、質的研究班のメンバーとして注目したいのは、そのような進化的基盤を持つ人は、とりわけ喪失経験において、宗教／スピリチュアリティに支えられつつも、その喪失に様々な意味を見いださずにはいられない存在でもあるということです。それは、逆境に直面してどのような物語を紡ぎ出し、人生に再び生きがいを見いだしていくのか、というライフストーリーの変化の問題といえるかもしれません。Haidt(2006 藤澤・藤澤訳 2011)がまとめているように、逆境に対して直接的に大きな助けとなるのが、喪失や難局に対する物語や解釈体系を提供する「宗教」だとすれば、宗教と意味再構成の関わりを質的に見ることは、科研のテーマである「苦難への対処」の多様な実際を描く上でも有効な視点ではないかと感じています。そして、文献検索の過程で、先ほどのキーワードに「意味(づけ)」を加えると、それほど知見が蓄積されていないこともわかってきましたので、質的研究班としてのオリジナリティをここに見いだすことができるのではないかと思います。

私自身はこれから勉強すべきことが山積している状態ですが、研究協力者としての役割を果たしながら、この科研に寄与できる成果を協働で生成できればと思っています。

Bering, J. (2011). *The belief instinct: The psychology of souls, destiny, and the meaning of life*. New York: W. W. Norton & Company.

(ベリング, J. 鈴木光太郎(訳)(2012)). ヒトはなぜ神を信じるのか・信仰する本能・化学同

人)
Haidt, J. (2006). *The happiness hypothesis: Finding modern truth in ancient wisdom*. New York: Basic Books.
(ハイト, J. 藤澤隆史・藤澤玲子(訳)(2011).
しあわせ仮説--古代の知恵と現代科学の知恵-- 新曜社)
Humphrey, N. (2011). *Soul dust: The magic*

of consciousness. New York: Princeton University Press.
(ハンフリー, N. 柴田裕之(訳)(2012). ソウルダスト--<意識>という魅惑の幻想-- 紀伊國屋書店)
浦田 悠(2013). 人生の意味の心理学--実存的な問いを生むところ-- 京都大学学術出版会

「被災者」と研究

大村哲夫(東北大学)

どうも動きが重い。というのは私自身のことである。私は本科研プロジェクトで質的研究班にあり、主に東日本大震災被災地の調査を担当している。また私自身が代表者を務める科研でも、被災地における宗教者と被災者それぞれのところと関係性の変化について研究を行っている。そしてそのいずれも、これといって「成果」の上がるような段階には達していない。

実は私は、この震災で住んでいた宿舎が罹災し取り壊され、市が国から借り上げた応急仮設住宅で暮らしている。まさにフィールドで生活していると言っても過言ではなく、フィールド・ワーカーとしては願ってもない環境のもとにある。私の住む棟にはいつも線香の匂いが漂い、入居後間もなく葬式も出た。若い母親と子どもたちだけの家族もいる。深刻な被害を受けたであろうことが想像できるのだが、私たち住民は、挨拶を交わし他愛のない会話はするものの、どこでどのような被災をしたのかについては語らず、触れることがない。先日私は、私を伝手に送られてきた支援物資を配布するため、仮設住宅集会所で行われている茶話会に参加したが、そこでも抑制的な雰囲気を感じた。TVなどで被災体験を語る被災者の態度は、日常ではなく特別の場合であるからであろう。

「被災地」では、私のような軽微な被害を受けた者は「被災者」とは呼ばない。そう呼ばれるのは「津浪」で「人的・物的」被害を受けた人に限る

暗黙の了解があるように感じる。私は「研究者」とも「ボランティア」とも「住民」とも言い切れない曖昧な立場にありながら、いくつかの仮設住宅を訪れ、継続的に行われている「カフェ」や「茶話会」に顔を出している。しかしこの曖昧性もあり、カメラやリコーダを取り出すことには心理的抵抗を感じ、興味深い話が聴けることがあるものの、踏み込んだ質問をしたり記録することが躊躇われている。被災レベルの低い者は、より被害が大きかった人に語りかける言葉をもたないのだ。

また私は震災前から「死生論」という授業を担当している。必須でないにも関わらず、朝5時半に家を出、代替交通機関を乗り継いで授業に参加している学生もいる。学生達は半年間の授業を終える頃になってやっと自分の被災体験をレポートに綴り始める。授業を受けること自体辛い時もあり(最後まで重かった、といいながら毎回出席した学生もいる)、棚上げしてしまいたい記憶と、それでも向き合わなければならないという気持ちの葛藤の中、やっと人間関係のつながりの中で文字化することが可能となるようだ。そして紡ぎ出された文章は20代の学生でありながら深く、語られる内容と言葉の重みに私自身たじろがされている。

こうした状況の中で生活していると、半構造化面接などを行ったところで一体何がわかるだろう、という気がしてくる。「質的」な研究というからには、人間関係を結びながら、もっと深いところに

達することがなければ意味がないだろう。もちろん人間関係が深まれば、バイアスがかかるのは当然である。しかしそうした個性と個性の出会いの中で、何かお互いに“はっ”とするようなもの、意識していなかった感情に気づくような体験を共

有することができれば、「成果」と言えるのではないだろうか。そのためには被災地であって、重たいところを引き摺りながら、小まめにささやかな関わりを続け、長い目で見た調査を進めていく必要があると考えている。

宗教心理学の研究会プロジェクトに期待できる貢献

ミカエル・カルマノ(南山大学)

昨年12月上旬、定期的に開かれる中部地方経済界のドイツ人の会合で、一人の参加者は突然ドイツの有名な神学者兼精神科医 Eugen Drewermann を話題にあげた。私がカトリック教会の司祭であることを彼は意識したこともあったであろうが、久しぶりに Drewermann について意見交換ができたことは、宗教教育研究会に参加している私にとってまた色々振り返る良い機会となった。

有力な企業で営業を担当する責任者であるこのドイツ人から想定する話題提供ではなかったが、彼は何年か前に Drewermann の講演を聞いて、「宗教の本来の意味と目的は人を癒やすことだ」とか、「信仰の対立概念は Angst (不安・恐怖)だ」とか、「必要以上に罪悪(感)(guilt)を与えている」とか、キリスト教教会を批判する Drewermann の主張に納得したそうである。

確かに、(永遠の)罰に対する Angst は各宗教の共通点であり、そして昔から芸術的なイメージを通して次世代に伝えられてきたと言えよう。日本でロングセラーとなっている「絵本地獄」^{*1}や、最後の審判を描く、長い間カトリック教会の葬儀ミサ(レクイエム)に使われてきた "Dies Irae" (「怒りの日」)の有名な曲(モーツァルト、ヴェルディ)はその具体例と見なすことができる。い

うまでもなく、「人を罪悪感の虜にする」宗教は昔から批判の対象となっているが、Drewermann は(普段宗教に敵対すると考えられている)深層心理学の観点からこの宗教のイメージの誤解を指摘するとともに、同じ観点から信仰の本当の姿と役割を回復できる道を示そうとしている。

Drewermann は特に historical-critical method^{*2}を取り入れた近代の聖書学に対して不満を持っている。彼は著書の "Tiefenpsychologie und Exegese" (「深層心理学と聖書解釈学」)^{*3}で聖書に記されている言葉の歴史的・文化的背景と、その言葉が伝えようとする信仰が現代人にとって何を意味するかとの間にあるギャップを取り上げている。換言すれば、テキストの様式と(書かれた当時の)意図に拘る近代聖書学は、歴史の次元を超える信仰の理解に役立たない、という主張である。別な著書で Drewermann は、イエスの奇跡を(単なる)象徴的な出来事として信じているのではないかという質問に対してこう応える。「私は信ずる。象徴的な現実こそ唯一の現実

*1風濤社、1980年第一刷発行

*2歴史的・批評的方法:「その最初期の形態と状況において意味していたものに基づいて、聖書本文の意味に迫ろうとする方法。」ドナルド・K・マッキム著、高柳俊一他監修、『キリスト教神学用語事典』、日本キリスト教集団出版局、2002年、438ページ

*3Olten und Freiburg im Breisgau: Walter-Verlag, 1984.

的な現実だ、と。)*4「信仰を支えているのは、(単なる)「史実」として聖書に記されているイエスの言動ではなく、そこに隠されている象徴的な現実であり、そして深層心理学こそこの象徴的な現実に向けるための手助けとなると神学者でもある Drewermann はいう。

深層心理学こそキリスト教の長い歴史で見えなくなった真理をもう一度掘り起こし、イエス・キリストの本来の教えにさび付いた不純物を取り除いて、信仰の本当の姿を復元すると主張してきた Drewermann は1991年に聖職者養成コースの教授資格を失い、次の年に司祭職の停止を受けたのは決して不思議ではない。互いに矛盾する(と見られる)自然科学と宗教的世界観との対立と違って、Drewermann は「科学」として位置づけられている深層心理学の観点から宗教、教義、信仰の再構築を目指しているという印象を与えているからであろう。

本研究会に参加して再確認出来たと思ったことは、研究室の本棚でほこりをかぶっていた Drewermann の著書を手にとった時また頭に浮かんできた — 宗教心理学は他人事ではない、と。何故かという、対象となっている「宗教」は必ず(不信仰を含めて)自分が持っている信仰

への問いかけになるからである。教義の歴史的な発展を分析する神学・聖書学と違って、人が持っている信仰(或いは迷信)や、宗教団体の集団心理などに対して「第三者」の立場・観点をとることは不可能に近いであろう。)*5このような宗教心理学が貢献できることは何であろうか。

Drewermann のように、深層心理学を武器にして宗教や宗教団体が抱えている問題を弾劾し、その解決策を提供しようとするのは、私が考えている宗教心理学の姿ではない。むしろ、進行中の科研費プロジェクトのように、人の(宗教に関連がある)行動を分析し、個人的・社会的次元で理解する試みと見なしたい。行動科学 (behavioral science)として概念の数量化を中心とする方法論を用いて、宗教心理学は数値が提示している事実関係を追求できるようになる。それと同時に、数量化に適していない、数値の後ろに隠れてしまうかもしれない真理(象徴的な現実)を視野に入れて研究を進めることも宗教心理学の役割であると私は思う。

言うまでもなく、適切な尺度の選択は行動科学にとって共通の課題である。例えば、現代のソーシャル・メディアを代表するフェイスブックの利用は学業成績に貢献)*6するか、それとも悪影響)*7を

*4«Ich glaube, daß die symbolische Wirklichkeit die einzig wirkliche Wirklichkeit ist.» Eugen Drewermann, "Bilder von Erlösung. Das Markusevangelium." Erster Teil: Mk 1,1 bis 9,13. Olten und Freiburg im Breisgau: Walter-Verlag, 1987/1988, p.442.

*5考えてみれば、自分自身と研究対象とを完全に切り離すことができないのは宗教心理学の魅力の一つであるかもしれない。

*6 "Study: Facebook isn't a grade killer. New research offers another view of how social media affects student grades." By Dennis Carter. *eCampus News*, January 10, 2010. [URL to article: <http://www.ecampusnews.com/top-news/study-facebook-isnt-a-grade-killer/>]

"Using Facebook could help boost exam grades. Students' use of social networks like Facebook could help boost their exam grades, according to new research." *The Telegraph*, December 30, 2012 [URL to article: <http://www.telegraph.co.uk/technology/facebook/9771416/Using-Facebook-could-help-boost-exam-grades.html>]

*7"Want to raise your GPA? Quit Facebook." Posted By Denny Carter. *eCampus News*, September 21, 2011. URL to article: <http://www.ecampusnews.com/top-news/want-to-raise-your-gpa-quit-facebook/>

与えるか、フェイスブックと学業成績との関連を対象とする最近の研究は、一貫した見解に至っていない。何をもって教育への影響とその結果を評価するかという、実証的なカリキュラム研究が抱えている典型的な問題である。PISA^{*8}のような国際的な標準テストの成績(だけ)で加盟国の学校教育を比較・評価する試みはもう一つの具体例であろう。つまり、フェイスブックの利用がもたらしめている多岐にわたる効果や、子供に影響を与える要因が多い環境である学校での学習を、一つの尺度(学業成績)で測ろうとすれば、重要な結果が見えなくなってしまう可能性が大きい。

アンケート調査であれば欠かせない属性項目の設定を巡る議論に加わって、宗教心理学の研究もやはり、同じように、適切な設問の問題を抱えていると私は思った。知ろうとしていることは何であろうか。それを知るためにどのような質問をすれば良いのであろうか。先行研究との比較を考えれば、従来のアンケートの設問は確かに参考にはなるが、従来の設問を見直して、新しい質問の開発もこのプロジェクトの成果にしたいと私は思う。多少くどい主張にはなるが、本研究の対象は宗教そのものではないので、今生きている

人が信じている宗教とは何かを正しくとらえる設問が必要なのである。^{*9}

人間関係の中で展開する信仰・宗教であるからこそ、一つの「結論」、ニュートン学説に相応しい、変わらない法則の発見を期待するのは場違いではないかと私は思う^{*10}。本研究会のプロジェクトから宗教・信仰に対する誤解の軽減、宗教・信仰にまつわる危険の指摘が得られればありがたいが、私は必ずしもこのような実用的な効果を期待しない。それどころか、宗教を社会改革や、信仰を個人の成長を助ける道具に仕立てることも、このプロジェクトの目的と考えたくはない^{*11}。先ず変わりつつ自分と社会とを理解するための手助けとなる、宗教・信仰の新しい側面の発見に貢献することを期待したい。

敢えて言えば、答えを提供するよりも適切な質問、自然科学、そして行動科学の方法論だけでは見えない質問を促し、提示することを(信仰を持っている一人の人間として)宗教心理学の課題と考えたい。宗教も出身も違う研究者から成り立つ本研究会の協力体制ならできると私は確信している。

*8経済協力開発機構が3年に一回実施している学習到達度調査, "Programme for International Student Assessment".

*9考えてみれば、人の「心」は(中世の神学者が人の靈魂を対象にしたように)心理学の対象にはなり得ない。他人との係の中での「心」でないと、観察も不可能である。

*10したがって、Drewermannの主張は深層心理学の過大評価ではないかという印象も受ける。

*11拙者の『「宗教を考える教育」でいう宗教とはなにか。』宗教教育研究会(編),「宗教を考える教育」, 教文館, 2010年, pp.88-109を参照。

質的研究班の取り組みと今後の取り組み

川島大輔(北海道教育大学)

1. 研究の目的

質的研究班では、喪失経験を通じた意味の再構成と宗教性／スピリチュアリティとの関係に着目しています。喪失経験は、後悔や自責の念、怒りといった側面と同時に、ある種の解放感や喪失を通じた成長といった肯定的な側面が複雑に絡み合った形で、また個人の主体的な意味再構成の活動の結果として、多声的に表現されるものだと思います。質的研究という方法論の特徴を生かし、こうした複雑かつ多様な意味再構成のありようを掬っていきたくと考えています。

宗教性／スピリチュアリティと喪失の関係性を検討するにあたって、震災による複合的な喪失(近親者との死別、家屋・居住地等の喪失など)に着目しています。これには先の東日本大震災以降、宗教者によるケアの意義が記事や報道で散見されたように、喪失後のケアあるいは意味の再構成における宗教／スピリチュアリティの重要性が、日本社会において近年再認識されていることも関連しております。また先行研究においても、宗教者による対話(語り、儀礼・儀式)が、喪失を経験した人の精神的健康やその後の意味の再構成プロセスに少なからず影響していることも指摘されています。ただし宗教者によるケアが、喪失を経験した当事者にとってどのように意味づけられるのかについては、不明瞭な部分も多く、実際には宗教的ケアが肯定的に働く場合もあれば、否定的に働く場合もあるでしょう。そのため質的研究班では、宗教者と喪失を経験した当事者との相互行為に着目し、両者の意味づけのあいだ、とくに認識の「ずれ」に着目しています。なお研究では、「ずれ」を解消すべきものとしては位置づけはしません。なぜなら「ずれ」はどのようなコミュニケーションにおいても一定程度あるものだからです。そしてむしろ「ずれ」を明示化することが、次の新たなコミュニケーションを促すと考えています。

2. 研究班のメンバー紹介

研究班は4名のメンバーから構成されています。東北大学の¹大村さんにはとくに東北フィールドでのイニシアチブをとってもらっています。京都大学の²浦田さんには理論・先行研究のレビューのイニシアチブをとってもらっています。浄土真宗本願寺派高善寺の³武田さんには、とくにインタビューの実施に際して活躍していただきます。そして班長のわたしとなります。いずれもインタビュー、ライフストーリー、質的研究に精通したメンバーであり、また各自の専門性や領域が少しずつずれていることが、本研究を進めていく上で大変有効であると考えています。

3. 現在までの取り組みと今後の展開

上記の目的を受けて、質的研究班では、現在大きく3つのアプローチを通じて研究を進めています。すなわち1)関西フィールドでの調査展開、2)東北フィールドでの調査展開、そして3)理論・先行研究のレビュー、です。

これまで関西でのフィールドワークを行い、阪神淡路大震災の震災モニュメントや、震災後に作られた「人と防災未来センター」などを訪問しました。また長年、遺族の語り部の会に参加している京都大学防災研究所の矢守克也教授へのヒアリングおよび意見交換などを行ってきました。

また東北でも宮城県を中心にフィールドワークを行い、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県本吉郡南三陸町と同石巻市立大川小学校、仙台市若林区と名取市の沿岸部などを視察しました。また東北大学実践宗教学寄付講座の谷山洋三准教授へのヒアリングおよび意見交換も行ってきました。

レビューについては、これまで多数の関連文献を収集し、現在、レビューにあたっての観点の絞り込みを行っています。

今後さらに仙台を中心とした東日本および、阪神・淡路大震災を経験した関西の2つの地域を中

心に調査を行う予定です。これにより、文化歴史や地域性、喪失の内容、あるいは時間が喪失後の意味再構成や精神的健康に及ぼす影響についても検討したいと考えています。同時に、宗教的ケアを行う宗教者およびそれを受ける当事者の両方にインタビューを行うことで双方の意味の

多声性に着目し、そのずれを詳らかにすることにより、当事者間のコミュニケーションの改善に資することを目指しています。

今後の質的研究班の取り組みにぜひご期待ください。

ポップな大衆向け文化としてのスピリチュアリティ

具志堅伸隆(東亜大学)

現在、日本は長引くデフレ不況、少子高齢化による社会構造の変化、迫り来る大震災、原発事故等々、様々な苦境に見舞われ、混沌とした大変動のただ中にあり、「社会不安」が常態化しています。このような状況で、まず必要なのは、言うまでもなく、合理的な思考と努力です。しかし、いかに合理的な努力を尽くしても、それだけでは乗り越えられない部分が残るのも事実です。むしろ、世の中、思いどおり、期待どおりに行くことのほうが珍しい。「一寸先は闇」という状況の中、多くの人々が不安を抱えながら生きているのが実情だと言ってよいでしょう。古来から、こうした生きてゆく上で避けられない不安やストレスに対処する上で、宗教は重要な働きを果たしてきました。宗教的には、超自然的な説明体系を提供することによって、人生に「秩序の感覚」と「安心」をもたらす働きがあります。人はいつの時代も、宗教や信仰がもたらす安心感を必要としてきましたし、現在も、そしてこれからもその希求に変わりはないはずです。

今回の科研プロジェクトは、分かちがたく結びついている人と宗教との関わりに、心理学的・実証的な観点から光を当てる画期的な試みだと言えるでしょう。以下では、私がこれまで関心を持って取り組んできた研究テーマについて述べ、今回のプロジェクトとの結びつきを整理することとします。私はポップな大衆向け文化としてのスピリチュアリティが果たしている心理的機能に関心を持ち、検討を行ってきました。具体的な宗教に帰属するわけではないものの、神仏や目に見えない

超自然的な力の存在を否定しているわけでもない。過大なご利益を期待するわけではないが、「もしかしたら、いいことがあるかもしれない」と心のどこかで思い、ここぞという時には神頼みをしたり、さまざまな縁起をかついだりするのは非常に身近な行為です。特に現在、そういったニーズに応えるべく、関連書籍をはじめ、さまざまなグッズやヒーリングなどのサービスを扱うビジネスが盛んになり、「スピリチュアル市場(有元, 2011)」が形成されつつあります。

例えば、ベストセラーとなった「ザ・シークレット」(Byrne, 2006 山川・山川・佐野訳 2007, pp. 28)では、以下のような内容の主張がくり返し述べられています。

"思いは磁石のようなもので周波数のある波動を発しています。考えるとその思いが宇宙に放射されます。それはまるで磁石のように似た周波数のものを引き寄せます。発信したものの全てが発信源に戻ってくるのです。そして、その源がまさに「あなた」なのです"

これは「磁石」や「周波数」という言葉から、一見、物理現象のようなイメージを喚起させますが、物理的には決して起こりえない現象です。ここに登場するのは「神仏」ではなく、非人格的な「宇宙」という言葉であるものの、明らかに神仏に似た「超自然的な力」として、それに頼ろうとする態度を読みとることができます。

このような態度は、間違った方向へ進めば、人々の合理的な判断能力を著しく歪め、悪質な靈感商法・スピリチュアルビジネスによるマインドコ

ントロールや搾取の被害を生み出す危うさをもっています。しかしその一方、生きてゆく上で避けられない不安やストレスに対して、ある種の回答を提示することによって、不安を吸収するコーピング機能を、一定程度、果たしていることも事実でしょう。私のこれまでの研究では、スピリチュアリティ信奉が自尊感情や主観的幸福感と正の関係にあることが確認されています(具志堅, 2011)。

基礎的な研究が一段落つき、次の方向性を探っている時期に、今回の科研プロジェクトのお誘いを頂きました。とても幸運なことでした。単独で研究を行ってきたこれまでは、学会等で発表を行っても、なかなか期待するような反応が得られず、自分の研究のあり方が正しいのかどうか、自信が持てなくなることもありました。プロジェクトとして、関心を共通する皆様と一緒に研究ができるのは、大変心強く、研究の動機づけも高まります。同時に、各方面の多彩な方々が集い、宗教性やスピリチュアリティについて、様々な観点か

ら議論できることで、自分の研究をこれまでとは違った新たな視点からとらえることも可能になりました。今回のプロジェクトを通じて、ポップな大衆向け文化としてのスピリチュアリティに新たな光を当て、その正しい評価と運用について検討してゆきたいと考えています。

有元裕美子(2011). スピリチュアル市場の研究
ーデータで読む急拡大マーケットの真実ー
東洋経済新報社

Byrne, R. (2006). The secret. Simon & Schuster Ltd. (バーン, R. 山川紘矢・山川
亜希子・佐野美代子(訳) 2007 ザ・シーク
レット 角川書店)

具志堅(2011). 素朴な信仰心に関する基礎的
研究(4)ー「(短縮版)スピリチュアリティ的信
念尺度」の作成および主観的幸福感との関連
性についての検討ー 日本心理学会第74回
大会発表論文集, 103.

礼・節と討論とデータ開示

Masami Takahashi(イリノイ州立ノースイースタン大学)

今回は時間の調整ができたおかげで初めて科研プロジェクトの会議に出席することができ、また、日本の方々とともにこのような大がかりなプロジェクトに参加するのは初めての経験なので色々な面で刺激的であった。ここではプロジェクトの内容やデザインに関するのではなく個人的に印象に残ったことについて述べてみたい。

まずは日本特有の年功序列制度についてである。僕は会議の初日はたった一人だけネクタイとスーツといういでたちだったため、そのおかげで他の参加者より「一目置かれている」と感じていたのだが、個別に話してみるとどうも僕の仕立てのいいスーツとセンスのいいネクタイのおかげではなく、会議の中で一番年長の僕の年齢や経験に一目置いているとのことであった。中学や高校の部活動ではあるまいし、と思ったがここではそ

ういう伝統やしきたりを批判する気は毛頭なく、逆に幼少の頃、課外のグループ活動で先輩たちに一目置かれていたことなどに懐かしさを感じるとともに、「礼節や義」というあまり僕が普段感じないことを経験できて大変興味深かった。

しかし、その一方でプロフェッショナルな会議の上では「礼節や義」という名目で要らぬ遠慮などをするがために、コミュニケーションが十分にはかりきれず、必要な討論を避けたりする状況が生じて、ある意味非常に非効率的だと思った。今回は少人数ということもあり、すぐに気心が知れて、また休憩時間等に参加者の皆さんに比較文化的な見地も交えてこのような話もしたおかげで、すぐに討論から「遠慮」が排除されたが、今後こういう機会がますます増える年配な部類に入る輩としては、若手の共同研究者が意見を言い

やすいように普段はあまりしない「気配り」を意識していきたくと思った。「そんな特別な気配りは必要ない」と思う方もおありだろうが、プロジェクトの成功を第一に考えれば道理にかなったことだと思う。ちなみに会議二日目はラフな服装で参加させていただいたのには、実はこのような思惑があったことをこの場をお借りしてお知らせしたい。

二点目は情報(データ)公開 についてである。会議の終盤、遠慮も通り越し、色々なトピックについて討論が出尽くした頃に僕が何気なく「今回のデータセットはいつ公開するの?」という旨を発言したら、凄まじい勢いで松島さんが「何言ってるんですか、データを公表することなど絶対ありません」という旨のことを言った。参加者の皆さんの説明を聞いてみると、どうも日本ではデータ公開はしないことが通常らしいことがわかった。これには正直たまげた。

僕は日本で高等教育を受けたことがないにもかかわらず、自分の育った学識的基準が日本の同僚のそれと同一だと勘違いしていた訳である。そういえば 90 年代初頭に日本でデータを取った時に「インフォームド Consent」を提示して、同僚に怪訝な顔をされた時と似ている。それでは何故、欧米ではデータ開示という考え方がほぼ常識化しているのだろうか? まず第一には最も古い科学学会であるイギリスの王立教会 (Royal Society) のモットー、"Nullius in verba" (言葉によらず)、に帰することが多い。すなわち、(キリスト教会等の) 権威の意見に頼らず実証研究によって事実確認をしていくことが科学の王道であるということであり、それはデータ公開して各々が分析/解釈をすることが望ましいという理念につながっている(また、これは 2011 年にオランダの心理学者 Stapel が捏造データに基づいた数々の研究報告を著名な学会誌に報告していたというスキャンダルとも無縁ではない)。さらに、こうい

う理念に基づいて、科学に携わる人々が一つの大きなコミュニティであるという考え方から、お互いを信頼し合い、みんなでデータを分かち合おうという感覚、更には科学が社会という大きな枠組みの中で果たすべき倫理的責任等もデータ公開という慣習につながっているのではないだろうか。

また米国においては情報公開法 (Freedom of Information Act) を受けて 1999 年に心理学研究とはつながりの深い国立衛生研究所 (National Institutes of Health) が、公共のグラントを受けた研究または文献発表された研究は要請があった場合にはデータを公開する義務があるという規制を設けた (http://grants.nih.gov/archive/grants/policy/a110/a110_guidance_dec1999.htm)。さらに 2011 年には APA においても APA の雑誌に発表された文献についてのデータ開示を奨励することとなった。Archives of Scientific Psychology がその先頭をきることとなっている。

ただ、ここで問題なのは「どのように開示するのか」ということである(実は僕としては、このことについて今回の会議では話し合いたかったのだが)。つまり、どれだけ手間ひまをかけて部外者に見やすくわかりやすいデータセットをつくるのか、またインターネットの普及により研究者以外の個人や団体が営利目的のためにデータを盗用することに対する対策、対処法等が現在議論されるべきではないかと思う。

実は会議終了間近に松島さんが「データ開示については再考する必要がありますね」と言ったのもこの辺のことについて考えを巡らしたからではないかと推測する。については次回の会議ではこのような議題が(年功序列を度外視して)討議・討論されることを期待したいと思う。

宗教心理学がつなぐ臨床心理学と仏教

武田正文(浄土真宗本願寺派高善寺
特定医療法人大慈会 三原病院 心理療法師
島根県スクールカウンセラー)

宗教心理学の未来、ぜひとも明るい未来が待っていることを願っております。浄土真宗の僧侶で臨床心理士という立場である私にとって、宗教心理学の未来は私自身の未来も重なるような思いがしています。今回の科研費プロジェクトでは、質的研究班に所属させて頂きました。正直に申し上げると、私は研究に対して苦手意識を持っていますので、このような大きなプロジェクトへの参加は不安も感じておりました。しかしながら、参加してみると様々な立場の方がお集まりになり、自由な議論ができる雰囲気があり、居心地の良さを感じて安心したことを覚えています。宗教と心理学、研究と実践といった多数の次元を同時に扱うことが、宗教心理学の一つの特徴です。複雑な領域であるからこそ、宗教心理学の未来は、一人の研究者が作り上げるというよりは、多くの人のなかで自由で創造的な議論が行われるなかで築き上げられるのではないのでしょうか。

質的研究班は、震災における喪失、そこでの宗教性やスピリチュアリティの意味を模索しています。平成24年度は、東日本大震災、阪神淡路大震災のそれぞれの場所でフィールドワークを行いました。震災の現場を実際に見ることによって、本やテレビでは知ることのできない、生々しい感覚が、より迫力をもって体験できました。私は阪神淡路大震災の方のフィールドワークに参加しましたが、これまで神戸を訪れたことはありませんでしたが、宗教心理学という視点からそれぞれの場所に立つと、また違った側面が見えてきました。

特に印象に残ったのは、神戸市中央区東遊園地にある「慰霊と復興のモニュメント」でした。公園にある噴水の真下に、震災で亡くなられた方の氏名が並ぶ空間が作られていました。その空間は地下に潜りこむように作られており、上を見上げると、ガラス張り、噴水の水と太陽の光が神秘的な雰囲気を出していました。そして、氏

名のプレートの前には、小学生が震災学習の際に書いたメッセージカードが供えられていました。また、そのメッセージを一つ一つ丁寧に見ている60代くらいの男性がおられました。お一人で長時間、その空間におられたようです。もしかすると震災で大切な人を亡くされたのかもしれませんが、この男性が、この空間をどのように体験しているのかは分かりません。子どもたちの「震災を忘れません」というメッセージをどのように受け止めたのかは分かりません。しかし、長い時間、その場所で過ごしておられる姿からは、何かこの男性にとって意味があるということは伝わってきました。もちろん、このモニュメントは特定の宗教を背景にしているわけではありませんが、そこには宗教的(スピリチュアル)な体験があるように思いました。

臨床心理学では、自我の発達、あるいは認知の修正など様々な方法によって、クライアントの適応のレベルを高めることを目指し、現代社会に大きな貢献をしています。しかし、宗教の問題を避けては、生きる意味や死んだらどうなるのか、何となく虚しいといったクライアントのニーズには応えにくい場合もあります。今後、宗教心理学の研究が進めば、宗教心理的なクライアントのニーズに対して、面接場面でセラピストがどのように対応できるかという臨床的な議論に結び付くと考えられます。個人的には、関係性や発達理論において、宗教心理学が貢献できるのではないかと考えています。

さらに僧侶という宗教者の立場としては、宗教心理学に対してさらに大きな期待を抱いています。僧侶としては昨今の商業主義的な宗教が人々を迷わせている様子を見るたびに悲しくなり、宗教者として何もできないことを情けなく感じたりしています。私は、宗教心理学という視点から、真の宗教とはいかなるものかということも考えて

いきたいと思っています。また、現在でも宗教間の争いが絶えず起こっていますが、本来、人々を救うはずの宗教が争いを生み出していることは、とても悲しい現実です。心に向き合うという共通の認識から、宗教間の有意義な対話にも繋がらないものかと考えています。

未来について考えていると、なんだか壮大なテーマに背伸びをしてしまいました。ただ、実際にこ

のプロジェクトでは様々な宗教の方が集まり、有意義な議論が行われています。この思い描く未来がいつやってくるのかは誰にも分かりませんが、このプロジェクトが出发点となり、宗教心理学が宗教間の対話や真の宗教の探求といった壮大なテーマに至る可能性はあるのではないかと感じています。

科研費プロジェクト(B)「宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連 —苦難への対処に関する実証的研究—」に参加して思うこと・期待すること

中尾将大(大阪大谷大学)

筆者は科研費の研究活動に参加したのは今回が初めてでした。これまでは仏教をベースとしていけば、「手弁当」で宗教心理学の研究を細々としてきました。そんな宗教心理学の研究者としては全く無名の筆者をこのようなビッグプロジェクトに誘っていただいたのは、研究代表者の松島公望先生からの一本の電話でした。内容は「一緒にプロジェクトに参加しないか」ということでした。色々考えましたが、このような機会はめったにないことだと思い、力不足を承知で参加することにしました。「これからどんなことが始まるのだろう」「一体、私に何ができるのだろうか」と不安と期待で第1回目の全体会議に出席したことを覚えております。

ふたを開けてみると驚きました。宗教心理学や宗教学、心理学等で有名な先生方や研究者が多数いらしていたからです。本でしかお名前を存じ上げない先生が目の前にいらっしゃることに驚きでした。その後の議論も大変興味深く、興奮するものでした。今後のプロジェクトの進捗が楽しみでした。これまで、学問領域を超えて宗教心理学の研究をおこなうことはなかったのではないかと思います。このプロジェクトに集った先生方の学識と叡智がこの分野の発展に大きく寄与してゆくのではないかと興奮を覚えておりました。

思えば、私がこの分野の研究に着手しはじめた2007年には、学会での反響はイマイチでし

た。中には「そんな研究をして何の意味があるんですか」と正面から全否定をされる方もおられました。それが今ではどうでしょうか、国がこの分野の研究は大変意義深く推進していく必要があると認めてくれるまでにはなっていないではありませんか。日本は世界でも稀に見るくらいに科学文明を高度に発展させた国です。もはや科学技術でなしえないものはないと思われている感があります。しかし、現実はどうでしょうか。年間3万人を超える自殺者を出し、引きこもりやうつ病、無差別殺人など枚挙にいとまがないくらいに多くの問題を抱えているではありませんか。科学一辺倒では人間は幸せになれないことを如実に物語るものです。

筆者はこの原因を現代人の持つ「孤独感」、「虚無感」にあるのではないかと思います。つまり、物理的には豊かにはなったが、精神的に埋めきれないものがある。それが孤独感と虚無感ではないかと。宗教にはそれらを埋める力があると思います。今こそ、人々を暗い孤独感や虚無感から救う「宗教が持つ力」を示す時だと思います。

その為には、これまでのように通り一辺倒な教義を説き、その教義に基づく生活をするように訴えるようでは真に人々に宗教は受け入れられないでしょう。それは「絵に描いた餅」だからです。そうではなく、教えを自らの人生に手繰り寄せ、なおかつ、説得力のある形にせねばならないと思うのです。その離れ業をやったのける可能性

があるのは宗教心理学ではないかと思えます。すなわち、これまでの教義に基づく哲学を構築してきた「宗教」と高度に発達させてきた科学の一分野である「心理学」の融合を目指すのです。

これまで宗教の分野で述べられてきた経験的な事象が、心理学の技術(調査・実験・統計など)により実証的に明らかにされることになるでしょう。これが宗教の持つ「心理的にプラスになる効果」を示すことになるのです。このプロジェクトでは、特に実証性を重んじています。ゆえに科学と宗教を一体化させて実証的な学問を示せる可能

性があると思うのです。

宗教と科学は決して相反するものではありません。物理学者のパスカルは熱心なキリスト教徒であったことは有名です。また、アポロ計画で月から帰還した宇宙飛行士の中には宇宙で「神と出会った」と述べ、帰還後に神父に転身した者もおりました。今こそ、科学一辺倒の世界観や価値観から脱却し、宗教と科学の融合を図る時期が来ているのではないかと思います。本プロジェクトがその先駆けとなることを期待します。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 17 号が発行されました。今回の内容は、「科研費研究プロジェクト」に参加している会員の方々にそれぞれの思いや考えていることを執筆していただきました。新たなプロジェクトを通して、これからの宗教心理学を展望するきっかけになればとの思いから特集を組ませていただきました。できるならば、この先、「宗教心理学の未来を考える」をテーマにしたシンポジウムを開催することができればとも考えております。

これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。(K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2013 年 6 月

第 5 回勉強会開催予定

2013 年 7 月

第 2 回関西地区勉強会開催予定

2013 年 9 月 19 日(木)～ 21 日(土)

日本心理学会第 77 回大会ワークショップ(第 11 回研究発表会)開催

[開催校:北海道医療大学心理科学部 会場:札幌コンベンションセンター]

発行:宗教心理学研究会
編集:宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当:松島公望[psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページ管理・運営

担当:横井桃子[psych.religion.web@gmail.com]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/